

魚を追いかけて、六カ月間の移住生活 —マカツサル海峡を渡るパジユクカン村の漁民たち

ニラム・インダサリ

●なぜ南カリマンタンへ？

クンブン（サバ）漁の季節が来ると、南スラウエシ州マロス県のパジユクカン村は死んだようにひっそりとなる。この村の大半の漁民たちが、約六カ月の間、マカツサル海峡を挟んだ対岸の南カリマンタンへ、海を渡って漁に出かけるからである。こうした漁の伝統は先祖伝来のもので、世代から世代へと受け継がれてきた。

今回（二〇〇六年）の場合、八〇隻の漁船が出帆したが、一隻に平均で二〇人が乗り込む。すなわち、一六〇〇人の村人が毎年、漁の季節になると一斉に村を離れるので、この村は死んだようになるのだ。

でも、どうして彼らは南カリマンタンへ出かねなければならないのだろうか。それは、南カリマンタンのバンジャルマシシ海域付近で大量に見られるクンブンを漁獲することが目的だからである。一月から五月にかけてがこの魚の漁獲シーズンである。海を渡る南スラウエシの漁民はこの魚を「イカン・バンジャル」とか地元言葉で「バニヤラ」(Banyara)と呼ぶ。一方、南

カリマンタンのバンジャル人は「ルマルマ」(rumarna)と呼ぶ。

バンジャル人の間で、この種類の魚はともよく知られている。しかし、南カリマンタンの漁民たちはこの魚を獲りに出かない。彼らが目指す魚はトゥンギリ（サワラ）やトンコル（マグロ）である。そして面白いことに、南カリマンタンの漁民が獲らないクンブンを漁獲するために、パジユクカン村の漁民がバンジャルマシシ海域で運命を任せようとするのである。

バンジャルマシシ海域で、パジユクカン村から来た漁民たちは五〜七日ごとに海に出る。強風に煽られたり、高波が押し寄せたりしても、漁に影響が出ることはない。

パジユクカン村の漁民にとって、それらは海に出る者なら誰もが直面するただの危険に過ぎないのである。それよりも漁民の頭を悩ませるのは、船を出している間に大量に必要な燃料の価格上昇である。

昼も夜も、彼らはパレンゲ (parenge) と呼ばれる漁具を仕掛けることに忙しい。パレンゲはナイロン紐でできた網に似た漁具である。パレンゲ以外に、もっと小型の

ガエ (gae) も使う。食料や燃料の予備が少なくなると、彼らは陸地へ戻る。あるいは、無線で家族へ連絡して、予備を洋上まで持ってきてもらう場合もある。

豊漁のときには最安で一尾七〇〇ルピア（約九円）だが、漁獲が少ないときは洋上で地元漁民に同一五〇〇ルピア（約一九円）で売れる。この地元漁民は、漁民と消費者を介在するブローカーの役割をする。パジユクカン村の漁民は、一週間の漁で最大二〇〇〇万ルピア（約二五万円）の収入を得ることもあるが、漁獲が少なければ、手ぶらで陸地へ戻ってくることになる。

●一時的な住民になる

南カリマンタンには、これら南スラウエシからの漁民が訪れる村が二つあり、六カ月の間、彼らはこの二つの村の一時的な住民になる。これら二つの村はキンタップ郡キンタップ村とジョロン郡ムアラ・アサムアサム村であり、二つとも同じ南カリマンタン州タナ・ラウト県に属する。実は、ほかにも海に近いところいくつか村があるのだが、この二つの村だけが幅の広い川に



バジユクカン村の港の朝の風景（筆者撮影）

面しており、漁民たちの船が海から入って停泊できるのである。

バジユクカンの漁民の話によると、バンジャル地方の地元住民は、この地方へ航海に来るマロスやセゲリやマンダール（訳注1）の漁民から航海術を学んだという。それどころか、バンジャル地方で漁船を造っているのは、ボネやラハ（訳注2）の人々なのだそうだ。一般に、漁船を建造しているのは、南カリマンタン州コタバル県のパガタン地区である。

●出発の前

今回、漁民たちが出帆する数日前、バジユクカン村で、私は、やはり南カリマンタンへ向かうという一人の村人と出会った。ハッジャ・リナという女性で、村人たちは十一月三〇日に出発するという。

出発の前に、彼らが行う儀式がある。このバラサンジ（Barasaji）と呼ばれる儀式は、旅に必要な物資を最初に船へ載せるときに行われる。出帆予定の船それぞれの甲板で二〇〜四〇人が出席して儀式は行われる。出席者は祈りの言葉を捧げ、その言葉を空へ向かってパッと飛ばすような仕草をし、船主と出帆する一行の航海中の安全を祈願するのである。

祈りを捧げた後、あらかじめ用意されていた食べ物が供される。カド・ミンニヤ（kado minnya）と呼ばれるもち米、伝統的な菓子、そして二房のバナナなどがバラ

サンジに出席した人々へ配られる。

私は、この季節に航海へ出かける漁民たちに話を聞いた。アムランという一六歳の青年は、今回が二回目の航海になるといふ。しかし彼はこの村の住民ではなく、遠く離れたジェネポント（訳注3）の出身である。村のある漁民から船を手伝うように言われてやってきたのだという。

私はこの夕方、あまり多く話を聞けなかった。激しい雨が急に降り出し、ちょうど棧橋の近くにある友人の家に戻ったからである。私の友人の家族は出帆しないのだ。なぜなら、航海に出るのは、実は、この村の元々の住民だけなのである。

よそからやってきた者は、通常は養魚池を運営・管理する。一方、元々の住民はいえは、南カリマンタンへ航海して戻ると、ジョロロ（joloro）と呼ばれる細長い小さな船だけを使い、岸壁近くの沿岸で魚やカニやエビを探るのである。

●村を離れる光景

次の日の夕方、私は再び棧橋に戻った。今回のほうがにぎやかな雰囲気だ。村人はバイク、冷蔵庫、テレビ、マットレス、その他家にあるものほとんどすべてを船に運び込んでいる。ニワトリやガチョウなどの家畜もカゴに入れられ、船の甲板の後部に置かれていた。まるで、一家をあげての離村の光景を見ているような気がした。

南カリマンタンに着くと、それらの荷物

は、あらかじめ購入しておいた彼らの家々に搬入される。でもなかには、その住民の家を借りるだけの者もいる。賃料は六カ月間で二〇〇万ルピア（約二万五〇〇〇円）であり、彼らの船を接岸する棧橋の借料もそれに含まれている。

「残された家には、きつとヤモリとネコとネズミしかないだろうな」と笑いなから言うサフルッデインは、マカッサル海峡を渡って航海へ出かける船の船主である。サフルッデインは一九九八年に船を購入したが、彼が南カリマンタンへ航海したのはそのときが初めてではない。三七歳の彼は、赤ん坊のときから家族に連れられて航海してきたのである。漁が上手になると、彼も洋上で魚を探す作業に加わった。

ようやく八年前に船を買えるだけの資金ができ、購入した船に「共に祈る」（Doa Bersama）と名づけた。この船名は彼の父親や兄が使ってきた二隻の船と同じ名前である。この村では、漁民という職業は先祖代々の職業なのである。

ムハツマド・ヤシンという三三歳の漁民も棧橋に座っていて、私に話しかけてきた。彼によると、この村の漁民がバンジャル海へ航海に出る伝統は一九五〇年代に始まったという。その頃の船にはまだエンジンが付いておらず、帆をかけ、櫂で漕いで航海した。一九六〇年代になって、漁民はエンジンを使い始めた。かつては約二週間かかっていた航海が、エンジンのおかげで二



桟橋で出帆を待つ漁民たち（筆者撮影）

三日間に短縮されたのである。漁民たちは、自分たちの持つ土地の権利書を担保に借り入れた銀行からの融資に大いに助けられている。船の値段はけっこう高く、約三〇〇〇万円ルピア（約三百万円）もする。中古船を購入する場合は一五〇〇万円ルピア（約一九万円）ぐらいである。これらの値段には、二〇〇〇万円ルピア（約二五万円）にもなるエンジン代はまだ含まれていない。銀行融資のおかげで、前は船を持ってなかった漁民の多くが船を買い、航海へ出られるようになったのである。

● 三日月の夜

夕方はまだ潮が満ちていないので、漁民たちは桟橋からの出帆をまだ夜まで待つことになる。漁民のなかには荷物の搬入を終えた者もいる。通常は、荷物の搬入を終えた後にも執り行う儀式がある。でも今回はいつもより簡素に行われたようだ。

ある船主の家族二人が、トレイに載せた調理用バナナと線香を船上に運ぶ。そして頭ターバンのように布を纏った一人の老人が船上へ上っていく。

私も立ち上がって船上に目をやった。一人の若者が線香とバナナの位置を整えている。そして、先ほどの老人がその前にあぐらをかいて座った。老人は祈りを捧げ、船主である家族がそれに続いた。

そして夜がやってきた。私は、船が一隻一隻出帆していくのを観るのにはいい場所を

探そうとした。でも桟橋はもうすでに人でいっぱいだった。しかたなく別の場所を探そうと歩いていると、涙を浮かべている若い女性に出会った。きっと、恋人の出発を思っているのだろう。ようやく、私は落ち着ける場所を見つけた。

この場所から、漁民が出発していく様子を直接眺めることができた。実は、桟橋に停まっている船だけが出帆するのではなかった。隣の集落からもたくさんの船が今夜カリマンタンへ向けて出帆するのだ。

船の上には、カリマンタンへ出発する家族が三世代までいるのが見えた。まだ学校に通っている子どもたちは、六カ月間は続けて向こうの学校に通う。でも、恋しくて家を離れられずに航海へいけない小さい子たちは、普通は村に残されるのである。

夜の闇のなかで次々に船が繰り広げるパレードを、私は約二時間にわたって眺めていた。海を渡っていく船の一隻一隻に対して、残された者たちが声をかけ、祈りを捧げている。この河口の縁で、別れを惜しみながら手を振り続けている。これから六カ月の間、たくさんの友や知人と過ごすはずだった時間が消えていく瞬間である。

船が次々に出帆していくなかで、私はふと空を見上げた。すると、思いがけず、流れ星が見えた。目を閉じて、心のなかで願いを唱える。流れ星を見たときに唱えた願いはきくと叶うと言われる。漁民の皆さんが今回も喜びに溢れるような成果をあげら

れますように。夜の帳のなかで唱えた、さやかな願いである。

(Milan Indrisari / ハサスディン大学 生)

(訳注1) マロス (Maros) はマカッサルの北、車で約一時間に位置する県。セゲリ (Segeli) はマロスのさらに北のパンケッブ県にある地区。マンダール (Mandar) は西スラウェシ州に属する地域を指す通称で、主にマンダール人が居住する。いずれも、スラウェシ島の南西部にあり、マカッサル海峡に面している。

(訳注2) ボネ (Bone) は南スラウェシ州東部のボネ湾に面した県で、ブギス族の王国の中心地。ラハ (Laha) は東南スラウェシ州ムナ島の中心地である。造船技術に関しては、南スラウェシ州南部のブルクンバ県タナベル地区で「フィニシ」と呼ばれる伝統木造船の建造を行う集団があり、彼らがカリマンタンなど各地に移り住み、造船技術を伝えたといわれている。

(訳注3) ジェネポント (Jeneponto) は、南スラウェシ州の州都マカッサルからさらに南に車で二時間ほどのところにある県である。乾燥地が多く、土地がやせているため、農業に不適な場所が少なくなく、昔から、男たちがベチャ (輪タク) 曳きなどとして、マカッサルへ出稼ぎに行くことで知られている。



荷物を船に搬入した後も船上で儀式が行われる（筆者撮影）

〈訳者による解説〉

筆者のニラム・インダサリは、本連載のソースとなっている「パニシクル」の常連投稿者の一人で、すでに本誌二〇〇七年六月号に「マカッサル・カレボシ広場と七墓の墓」が掲載されている。今回の記事は、二〇〇六年一月に南スラウエシ州マロス県、パジユクカン村を彼女が何度か訪問し、取材して書いたものである。

スラウエシ島とカリマンタン島の間に横たわるマカッサル海峡は、日本向けの石油タンカーも航行する国際航路であるとともに、昔から中国などへのナマコやフカヒレなどの海産物や中国からの物産を積んだ交易船が通る重要な航路であった。この海峡周辺に居住するブギス族、マカッサル族、マンダール族にとっては、まさに生活の舞台であり、頻繁に両岸を行き来することはごく当たり前という意識がある。

実際、彼らの親族でカリマンタン島の東・南海岸に居住している者は数多い。とくに、出身が同じ村の者どうしで固まってカリマンタン島に住んでいる場合がよく見られる。そして彼らは、その延長線上という感覚で、マレーシアのサバ州などへ出稼ぎ労働に出かけるのである。東カリマンタン州の政府高官や実業家にはスラウエシ出身者がかなりおり、また、さらにマレーシアへ渡って成功した者も少なくない。

南スラウエシで生産された高原野菜やオレンジなどの果物は、西スラウエシ州の州

都マムジユから東カリマンタン州の州都バリクパパンへ、トラックに載せたままフェリーでマカッサル海峡を渡る。そこから一里は、東カリマンタン州内を南下して南カリマンタンに運ばれ、その先は再びフェリーでジャワ島の大消費地へと運ばれていく。マカッサル海峡は、スラウエシ島とカリマンタン島を隔てているが、実は二つの島の両岸を密接に結びつけている海なのである。マカッサル海峡を隔てて、とくに親族を基にした人的ネットワークが縦横無尽に張りめぐらされているのである。

マカッサル海峡に面したこれらの地方では、漁に出ると何日も陸地へ戻らないことは珍しくないが、文中のパジユクカン村のように、六カ月もの間、村人のほとんどが移住してしまふ、しかも、家族も連れて行くという事例は、決して多くはないだろう。おそらく、南カリマンタンにかなり前に定住した村人の家族がおり、それがきっかけになって、村人が集団で動くような形態に発展していったのかもしれない。そして、そこには村の人々とは何の関係もないヨソ者は入り込んでこないようである。

考えてみれば、一つの場所に定住するという生活形態は、必ずしも地球上で普遍的なものではないのではないか。たとえば、ブギス族やマカッサル族の漁民は、季節風の方向に従って漁場を渡り歩き、一年経つと最初の場所へ戻ってくる。その一年の間に三カ月ぐらいつ定住する島があつて、

そこにそれぞれ家族を持つ者もいる。そんな話をかつて聞いたことがある。

「海の人」（オラン・ラウト）と称されるバジャウとかサマとか呼ばれる人々もまた、海上で生活しながら漂泊した歴史を持っている。パジユクカン村の漁民の歴史はこれらの事例とは異なるかもしれないが、こうした普通の人々が、国や自治体が机上で決めた境界を軽々と越えていくのである。マレーシアへのインドネシア人出稼ぎ労働者の問題も、こうした背景を頭に入れて考える必要があると思われる。

本文中にあるように、バンジャルの漁民はサワラやマグロを追い、パジユクカン村の漁民たちは売価のより安いサバを追う。後者が前者に漁を教えたとされるにもかかわらず、現実には、魚種による分業的漁業というか、あるいは、漁民間での一種の階層が形成されている様子がうかがえる。

経済開発の観点から「パジユクカン村の漁民が移動せずに、一年中、村に定着して暮らせるようにすべきである」と外部者が評論することはたやすい。しかし、村をあげてマカッサル海峡を移動するサバ漁は、単に金銭的な収入増加を求めるという意味だけではなく、もしかすると、村人どうしが自らのコミュニティを維持していくための、何らかの重要な意味を持っているのかもしれない、と思えてくるのである。

（まつい かずひさ／在マカッサル海外調査員）